探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：三原市立第二中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
三原市立第二中学校	12	375
三原市立三原小学校	17	479
三原市立中之町小学校	16	308
三原市立深小学校	5	31
三原市立鷺浦小学校	3	13

（R3.11.1現在で記入）

１　指導上の課題

・探究に向かう力の個人差が大きい。
・自己有用感が低い。
・主体的な学習者になっていない。
・課題解決に求められる力が十分に育っていない。
・各校の実態に大きなばらつきがある。

２　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

児童生徒が主体的に探究し，資質・能力を高め合う学びの創造
～生活科・総合的な学習の時間における
プロジェクト型学習の考えを基にして～

生活科・総合的な学習の時間におけるプロジェクト型学習の実践を通して，主体性をはじめとする各校で設定した資質・能力を効果的に育成することをねらう。

（２）資質・能力の設定について

二中校区で統一して育成をめざす資質・能力として「主体性」を設定した。三原市教育創造ビジョンに照らし，二中校区での「主体性」を認識，思考，行動の３要素で整理した。

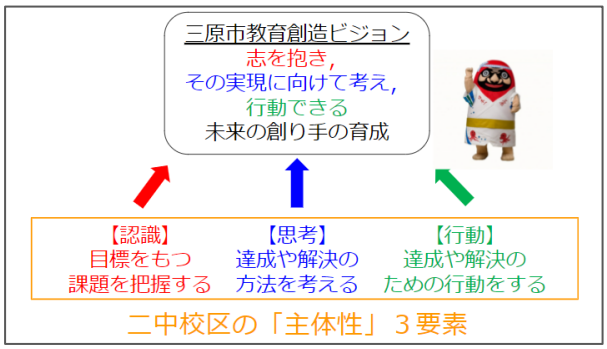

図１　二中校区の「主体性」３要素

（３）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

二中校区版のプロジェクト型学習として「三原だるまプラン～ちょっと好きからのもっと好き～」を提案した。児童生徒の主体性を育成するための２つのポイント（①児童生徒と教師で作成したルーブリック評価，②「ショック」を伴う探究課題の更新）を重視した単元を開発し，全校で取組を行った。

【小中連携の取組】

小学校４校と中学校１校の児童生徒の実態をすり合わせ，共通の目標をもちながら，互いの取組を改善していくために，まずは目標とする「15歳の姿」を設定した。それをもとに，二中校区でめざす「主体性」が育った児童生徒の姿を共有し，二中校区としてのルーブリックを完成させた。

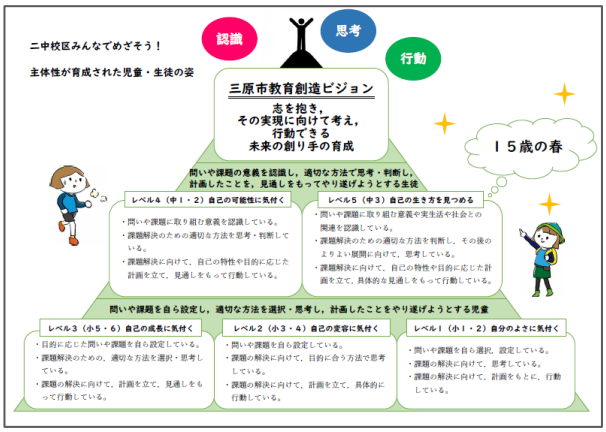

図２　二中校区の「主体性」ルーブリック

【資質・能力の評価】

次の３つの方法で，資質・能力の評価を行った。

①二中校区アンケート（主体性）

全国学力・学習状況調査，広島県児童生徒学習意識等調査の質問紙を参考に，二中校区アンケートを作成した。認識，思考，行動，探究，PBL（地域社会）の５項目で構成し，４月（小学校第５・６学年，中学校第２・３学年），12月と２月（全学年）に実施をして結果を分析し，交流した。

②児童生徒の自己評価（主体性，各校で設定した資質・能力）

毎時間のノート，ワークシートへの記録や，月ごと，活動のまとまりごとの主体性や他の資質・能力の育成に関する自己評価を行った。

③教師からの行動評価（主体性，各校で設定した資質・能力）

児童生徒の活動の様子を写真や動画におさめ，児童の言動から資質・能力の育成の様子を評価することにも努めた。また，写真や動画は児童生徒の自己評価の場面でも，活動の想起に活用した。

３　実践事例

【探究的な学習の充実に向けての取組】

２－（３）でも述べた「三原だるまプラン」の２つのポイントに焦点を当てた取組は次の通りである。

①児童生徒と教師で作成したルーブリック評価

児童生徒が取組の達成感を感じ，自己の成長を認識できるよう，学校で作成したルーブリックをもとに，児童生徒と教師で２段階のルーブリックを作成（以下，「子どもルーブリック」）し，めざす姿を共有した。作成した子どもルーブリックは，児童生徒の実態や単元，活動の特性に応じて定期的に修正して活用した。現段階で，子どもルーブリック作成の方法が４つある。実態に応じて最も適した方法で実施した。

１）教師と児童生徒との対話，話し合いで設定
２）教師からＢの姿を提示し，Ａの姿を設定
３）望ましい姿の案を出し合い，ＡとＢに分類
４）昨年度の子どもルーブリックをもとに修正

二中校区ルーブリックを中心に，学校ルーブリック，子どもルーブリックを設定して，小中で連携した取組をめざした。

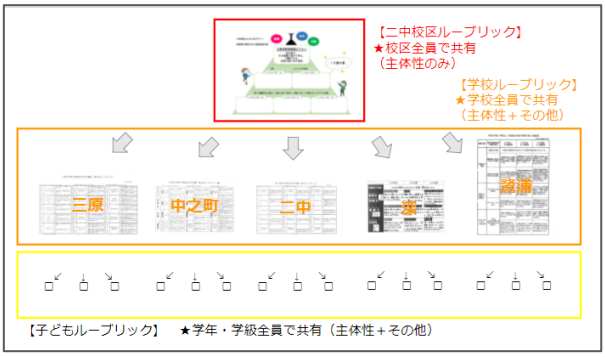

図３　二中校区のルーブリック設定の構図

②「ショック」を伴う探究課題の更新

「三原だるまプラン」では，まず，「仮の探究課題」を設定し，探究を始めた。ここでの探究は，探究テーマについて「ちょっと好き」になることを目的とし，児童生徒の気付きや疑問から，調べ学習や体験学習を中心に探究を進めた。その中で，児童生徒の心をゆさぶる「ショック」を経験させ，必要感と切実感をより強く抱かせ「真の探究課題」へと更新し，「もっと好き」をめざした。今年度，本校区内での実践では，主に，次のような「ショック」があった。

・楽しみにしていた祭りが２年連続で中止になってしまった。
・地域の情報誌に自分たちの町の情報が載っていなかった。
・漁師の高齢化や漁獲量の減少が心配されるたこつぼ漁が，実は世界で認められるほどの素晴らしいものであった。
・自分たちの地域を自ら選んで移住してくれる人がいた。等

【個に応じた指導の充実】

個に応じた指導を充実させるため，探究課題を設定する際に，まずは新しく見出した疑問や課題を個人で整理させた。個人の思いや願いに沿って，それぞれ探究課題を設定させ，必要に応じて，類似，関連する思いや願いを持った児童をグルーピングして探究のチームを結成した。個人の疑問や課題を重視して各々の探究課題を設定したことで，当事者意識をもって探究でき，チームを結成したことで協働的な学びにも発展させることができた。

４　研究の成果と課題等

（１）成果

１年間の取り組みを通して，４月と12月に行ったアンケートの結果に変容が見られた。小学校第６学年と中学校第３学年の例を示す。

表１　小６・中３の肯定的評価の割合の変容（４月→12月）

質問項目	第二中	三原小	中之町小	深小	鷺浦小
認識	−3.6	−10.1	−4.5	+19.6	±０
思考・行動	+7.4	+1.5	+14.2	+10.7	±０
行動	+2.7	+3.9	+8.8	+28.5	±０
探究	+2.4	+13.0	+13.4	±０	±０
PBL（地域）	+26.6	+25.3	+21.3	+44.6	±０

注：鷺浦小は児童数が１名であり４月時点で肯定的評価が100%

このように，「認識」以外のすべての項目で，全校の数値が上がっていた。学校それぞれに実態に違いがあるが，特に，地域社会への関心を尋ねたPBLの項目で，全校の結果が大きく上昇していた。どの学校も「三原だるまプラン」を実践する中で，地域の題材を扱ったり，地域の方との連携をしたりして，実生活や実社会の課題の解決をめざす探究を行ってきた成果だと考える。

また，児童生徒の自己評価やアンケート結果のみならず，行動評価でも，児童生徒の「主体性」の育ちを見取ることができる場面が数多くあった。

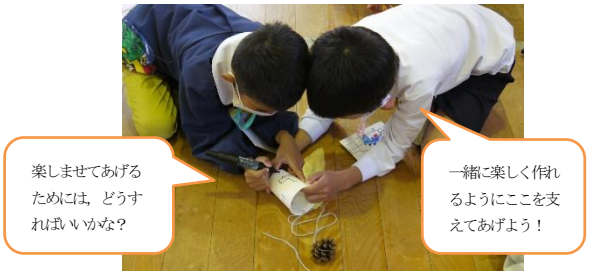

写真１　児童の「主体性」育成を見取ることができる場面

（２）課題

今年度の取組の課題は次の２点である。

①評価の在り方の検討

アンケートの結果からも分かるように，５校中３校で，夢や目標について尋ねた「認識」の数値が低下した。また，自己評価や行動評価からも，児童生徒の「主体性」育成に関する個人差が目立った。学習や活動に対する振り返りの機会を十分に持てていないことが影響していると考えられる。評価の在り方を今一度検討する必要がある。

②「ショック」の定義づけ

「三原だるまプラン」を通して，児童生徒の地域への関心は高まったが，「ショック」の定義が曖昧であり，どのようなものを「ショック」と位置づけ，数ある「ショック」をどのように分類するのかが明確ではなかった。

（３）今後の改善方策等

上記の課題をふまえて，改善方策として３点を挙げる。

①ルーブリックを用いた評価の充実

来年度は校区内の全校で子どもルーブリックを作成し，定期的に修正をするだけでなく，ルーブリックを用いた評価を継続して積み重ね，児童生徒の振り返りの機会を十分に確保する。また，児童生徒が探究の過程を評価し，自己の成長を自覚できるようポートフォリオとして整理する。

②個別最適な学びと協働的な学びが実現できる単元づくり

児童生徒が，自分で問いや課題を設定し，当事者意識をもって主体的に探究しつつ，友達や地域の方と協働的に活動できるよう，計画的に単元を構成し，多様な活動を通して資質・能力を育んでいける工夫をする。

③単元における「ショック」の効果の検証，整理，精査

「ショック」を伴う課題の更新をすることによって児童生徒の探究が深まったと考えられるが，「ショック」の効果の検証は不十分であった。また，児童生徒の実態や題材の特性によって，どのようなタイミングで，どのようなショックを経験させることが最適であるかについても検証しなければならない。そのために，校区内で実践された「ショック」を一度整理し，今後の実践に向けて精査する必要がある。そして最終的には，教師や大人が意図した「ショック」がなくても，自ら「ショック」を見つけ，探究を深めていける「主体性」を身に付けた児童生徒の育成をめざしたい。